

青森市小牧野遺跡出土の片刃打製石斧について

齋藤 岳¹⁾

Chipped Stone Axe of Single-edged shape found at Komakino Site in the Aomori City
SAITO Takashi

キーワード：旧石器時代、縄文時代草創期、神子柴・長者久保石器群、片刃打製石斧、石筥、再加工、小牧野遺跡

はじめに

青森県立郷土館は、外ヶ浜町大平山元Ⅰ遺跡の出土品を所蔵している。旧石器時代から縄文時代への移行期の神子柴・長者久保石器群のものである。筆者は、青森県内の同一時代の資料について比較検討の必要性を感じてきた。

川口（2010）による青森県域の旧石器時代のデータベース作成で、当該時期の資料についても、可能性を示された資料を含め一覧化された。

本稿では川口（2010）の一覧化した資料のうち、帰属時期が未確定と筆者が考える青森市小牧野遺跡の打製石斧の観察結果を紹介したい。

結論としては縄文時代前期から後期のものと考えた。その中でも縄文時代前期前葉の可能性が最も高いと考えた。そして、その考えの根拠とした石筥や磨製石斧等の図を掲載した。

1 小牧野遺跡の打製石斧

青森市の国史跡小牧野遺跡は縄文時代後期前葉の遺跡であり、大規模な環状列石が形成されている。

同遺跡の頁岩製の打製石斧（長さ 18.2cm、幅 4.5cm、厚さ 3.8cm、重さ 303.1g）は縄文時代草創期の可能性が示唆された（青森市教育委員会 1996）。打製石斧の出土地点は、環状列石の内帯内側に位置し、その構築作業に伴って古い時期の石器が露出し、再加工された可能性を考えての記載であった。しかし、表 1 のように帰属時期は、概要報告書（青森市教育委員会 1993）では縄文時代後期、総括報告書（青森市教育委員会 2006）では、縄文時代か弥生時代か不明とされている（注 1）。

青森県立郷土館所蔵の大平山元Ⅰ遺跡の珪質頁岩製の刃部磨製石斧は長さ 19.3cm、幅 8.4cm、厚さ 3.5cm、重さ 536.6g である。小牧野遺跡の打製石斧と長さはほぼ同じである。大平山元Ⅰ遺跡例は全体形状が撥形で、刃部に研磨加工がみられる。一方、小牧野遺跡のものは短冊形で、刃部の研磨加工はみられず、敲打加工が施される点が異なっている。大平山元Ⅰ遺跡からは他にも珪質頁岩製の打製石斧が出土しているが、敲打加工が施されている例はない。

2 筆者の観察と所見(図 1)

図 1 に、打製石斧の正面図を掲載する。1996 年刊行の報告書掲載の実測図は今後も引き続き使用していける正確さを持っていることを確認し、同図を下図として使用した(注 2)。剥離と敲打加工の順序、刃部加工の観察結果が読み取れるように改変し、他の面の筆者の観察所見は、写真に付したキャプションで表示した。

この石器は、剥離成型の後に敲打加工を重ねて器表面を整え、最後に刃部から器体中央へ向かう剥離加工が施されている。剥離成型後、稜線などの突出部を敲打加工して面を作り出している。磨製石斧や石棒など石製品の整形に、特に研磨前の前処理にみられるような器表面の凹凸の少ない敲打加工である。そして器体正面の中央から刃部よりは、敲打痕がより粗いが、その変化は漸移的である。敲打が 2 回にわたって行われ、粗い部分が再加工された可能性とともに、基部や側面など敲打加工の衝撃を受け止めるのが難しい器体の薄い部分を弱く敲打した。そして厚みのある正面先端部側では作業効率を上げるために強く敲打した可能性もある。

1996 年に刊行された報告書で、再加工が考えられたのは、刃部の剥離加工が最も新しい事と、器体の風化度合いに若干の差のある部分があるためと筆者は考えた。右側面の基部の平坦部分、裏面の一部が他の面よりも少し古いと感じられる。なお、裏面の接合部分に新しい欠損がある。

その他に、敲打痕の上に、研磨が施されているように見える部分が裏面の一部にある。意図的な研磨なのか、何らかの理由で生じた摩擦痕跡なのか判然としない。完成品と判断できれば、装着その他で発生した可能性が考えられる。しかし、この石器における最大の特徴である器体の敲打加工の意味が読み取れないため、完成品か加工途中の欠損なのか判然としない。

1) 青森県立郷土館 学芸課副課長・副参事（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

3 遺跡内及び他の遺跡出土の関連資料

小牧野遺跡の石筥には、小形で柄の部分が短く玉髄質の珪質頁岩が主に使用される大石平型石筥と、縄文時代前期以来の短冊形・撥形の珪化度合いが進んでいない珪質頁岩が多く使用されるものがある。発掘調査報告書の写真図版で、その傾向性は確認できる。両者の間に漸移的なものがあるためか、報告書では明確に区分していない。

さて、小牧野遺跡の総括報告書(青森市教育委員会 2006:120 頁)では、縄文時代前期と中期の土器は、いずれも「出土量は極めて少ない」と記されている。そのため、図2に示した小牧野遺跡の短冊形の石筥は、環状列石が形成された縄文時代後期前葉の時期の可能性は高くなると考えたい。その大きさを別にすれば、図2の『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』の第23図70～73は、今回取り上げた大形の打製石斧と全体形状は類似する。

青森県内の石筥の大形品としては、珪質頁岩の原産地周辺の遺跡である東津軽郡蓬田村山田(2)遺跡、中津軽郡西目屋村水上(2)遺跡からは、大形の石筥もしくは打製石斧、それらの原型となりうる石器が出土している。同じく珪質頁岩の産地付近の下北郡風間浦村古野(2)、古野(3)遺跡からは小牧野遺跡の打製石斧と全体形状が類似し、大きさの近い石器が出土している。最も類似するのは、上北郡野辺地町槻ノ木遺跡の「大形の石筥もしくは打製石斧」である(注3)。最大の大きさの報告書図34のS-22は全体形状と刃部からの剥離加工の状況が近い。異なる点は、小牧野遺跡例では器表面に敲打加工があることと、その側面の厚みが3.8cmに対してS-22は2.5cmと厚みがない事である。

4 石斧への敲打加工の時期的傾向性

安山岩・粗粒玄武岩製の打製石斧を敲打し磨製石斧を製作するのは縄文時代早期後葉の赤御堂式期の八戸市域周辺からである(工藤1993)。長七谷地貝塚をはじめとして八戸市周辺では早期末葉から前期前葉に盛行し、閃緑岩製のものは下北半島を中心に後期前葉に盛行する(齋藤2012)。後期初頭の例としては図3の右下の東津軽郡蓬田村坂元(2)遺跡のように、津軽半島海岸部の遺跡でも磨製石斧の敲打加工段階の未成品が出土している。

さて、大平山元Ⅰ遺跡、東北町長者久保遺跡の刃部磨製石斧は珪質頁岩製で刃部を中心に磨かれている。縄文時代草創期の岩手県滝沢市の室小路15遺跡の石斧も同様である(滝沢村教育委員会1999)。青森県内で縄文時代草創期の石斧で、敲打加工がほぼ全面に施されるものは、確認できなかった。

おわりに

小牧野遺跡の打製石斧は、縄文時代前期の円筒下層式以降の石筥のうち、短冊形のものに最も形状に近い。他の出土品と大きく異なるのは、敲打加工されている点である。全体形状からは縄文時代前期から後期、小牧野遺跡の環状列石内帯からの出土であることから、後期前葉の十腰内Ⅰ式に伴う可能性が最も高いと筆者は考える。製作途中に2片に割れたままに残ったとすれば、第Ⅱ層出土品という層序からも、さらにその可能性が高まる。器体の風化度合いに若干の差のある部分があるが、敲打痕とともに極端な時間差は筆者には想定できなかった。古い時期の石斧の再加工といえるのかは判然としなかった。磨製石斧製作の敲石としては、多面体敲石(阿部1984)があるが、小牧野遺跡の出土品の中ではその機能面に類似するものは図2左上の磨製石斧から敲石への転換品のみである(『小牧野遺跡Ⅷ』第107図-79)。敲打加工が盛んに行われた遺跡とはいいたいが、敲打加工が研磨加工の前段階の加工とすれば、頁岩の持つ質感を生かした棒状の石製品を転用した可能性もあるが、対応する石製品は探し出せなかった。

現状では類例が見つからず、その性格については不明である。図2・3に再加工の痕跡のあるものを含め磨製石斧も図示したが、平面形は類似していても、側面の厚みに違いがある。

あえて可能性を考えるとすれば、石斧の敲打痕跡は研磨の前処理ではなく、厚さを薄くして、形状を美しく整えるためといった事くらいしか思い浮かばない。

さて、各種文献の中で、旧石器時代や縄文時代草創期の石器の可能性が言及されたものの、出土状況が不明確な資料、出土層位から帰属時期を裏付けできない資料が県内各地に存在する。帰属年代についての結論が出ていない石器は他にもある。

これらについては、①石器を観察し、実測図として、カラー写真を所見ともに掲載すること。②それを複数の観察者が行い、所見を充実もしくは更新していくこと。③その作業を繰り返すこと。この①から③の作業の結果、多くの人が妥当としうる位置づけが可能になると筆者は考える。筆者自身も、自らの見解に錯誤がある可能性を思いながらも問題提起した。

そして、大形の石筥と打製石斧の区分について問題提起された例として青森県内では野辺地町槻ノ木遺跡の報告(青森県教育委員会1983)が最初のものと考えられる。石器集積跡から一括出土した29点の石器について、両者のいずれとも決めがたいとして「打製石斧あるいは大形筥状石器」として報告された。現在も未解決であり、留意したい。

謝辞

小牧野遺跡出土の片刃打製石斧の観察・図化にあたり、青森市教育委員会及び同所属の児玉大成氏からは多大なる御協力を賜りました。

厚く御礼申し上げます。

注釈

(注1) 弥生時代の可能性が言及されたのは、総括報告書の標準土層の記載部分で「第Ⅱ層 主に黒褐色を呈する。弥生時代～平安時代に相当する層」及び「調査区からは続縄文土器が出土。」と記載されているためと考える。報告書の実事記載としては客観的であり、穏当な判断と考える。縄文時代の中でも古い時期の石斧（の再加工品）の可能性についてが筆者の最大関心事であるため、次のように踏み込んで解釈する。続縄文時代の遺物は環状列石の外帯外側の調査区南側、第3・4号遺物集中ブロック、A-4・B-4 グリッドに多い。打製石斧の出土地点は環状列石の内帯内側のC-12 グリッドであり後期前葉の可能性がより高いと考える。

(注2) 筆者は、断面図の代わりに刃部の図をとり、右側面図の敲打痕の下に残る剥離加工を書き加えた。しかし器体が大きいだけに、正面図と対応させるための調整が難しく、最終的には整合できず、図化する事はできなかった。

(注3) 槻ノ木遺跡の石器は標準土層の第Ⅱ層の黒褐色土から 29 点が一括出土している。そのため原位置を留めていると考える。報告書の標準土層の写真と出土状況を見比べると、黒褐色土からの出土が明らかである。出土土器の比率から縄文時代中期に帰属する可能性が最も高い。神子柴・長者久保石器群であれば十和田八戸火山灰の下位に、隆線文土器以降の草創期の資料は十和田八戸火山灰の上位の漸移層から出土するはずである(川口 2011)。筆者も、縄文時代前期にも縄文時代草創期を思わせる両面調整石器等が津軽海峡域以北にあることを知らなければ、神子柴型石斧の可能性を考えた(田中 2001)と思うところである。

引用参考文献

- 阿部朝衛 1984「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第2号 1～12 頁
- 川口潤 2010「青森県」『日本列島の旧石器時代遺跡-日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース-』日本旧石器学会
- 川口潤 2011「大平山元遺跡群の位置づけ」『大平山元』外ヶ浜町教育委員会 92～100 頁
- 工藤竹久 1993「東北北部における縄文時代早期の石斧」『先史学と関連科学』37～49 頁 吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会
- 駒田透 2023「旧石器時代から縄文時代草創期へ」『青森の考古学』6～11 頁 青森県考古学会
- 齋藤岳 2012「本州北東端の磨製石斧製作-三陸の石材環境への適応と石斧製作の解明に向けて-」『研究紀要第17号』19～30 頁 青森県埋蔵文化財調査センター
- 田中英司 2001『日本先史時代におけるデボの研究』千葉大学考古学叢書1
- 青森県教育委員会 1983『松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第77集 165 頁 図34・166 頁 図35
- 青森県教育委員会 2005『三内丸山遺跡26』青森県埋蔵文化財調査報告書第405集 33 頁 図17
- 青森県教育委員会 2011『山田(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第508集 91 頁 図72
- 青森県教育委員会 2011『坂本(1)遺跡・坂本(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第508集 95 頁 図74
- 青森県教育委員会 2017『水上(2)遺跡Ⅲ第5分冊 捨場編』青森県埋蔵文化財調査報告書第575集 158 頁 図122
- 青森県教育委員会 2020『古野(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第611集 82 頁 図61
- 青森県教育委員会 2021『古野(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第621集 128 頁 図92
- 青森市教育委員会 1993『小牧野遺跡 発掘調査概報』青森市文化財調査報告書第20集 42 頁 第16 図 11
- 青森市教育委員会 1996『小牧野遺跡 発掘調査報告書』青森市文化財調査報告書第30集 167 頁 第103 図・171 頁 第107 図
- 青森市教育委員会 1998『小牧野遺跡 発掘調査報告Ⅲ』青森市文化財調査報告書第40集 42 頁 第19 図
- 青森市教育委員会 1999『小牧野遺跡 発掘調査報告Ⅳ』青森市文化財調査報告書第45集 38 頁 第16 図
- 青森市教育委員会 2003『小牧野遺跡 発掘調査報告Ⅶ』青森市文化財調査報告書第70集 49 頁 第22 図・50 頁 第23 図
- 青森市教育委員会 2000『稲山遺跡 発掘調査報告書Ⅰ』青森市文化財調査報告書第56集 219 頁 第142 図
- 青森市教育委員会 2002『稲山遺跡 発掘調査報告書Ⅱ』青森市文化財調査報告書第62集 493 頁 326 図
- 青森市教育委員会 2006『小牧野遺跡 発掘調査報告書Ⅸ』青森市文化財調査報告書第85集
- 滝沢村教育委員会 1999『室小路土地地区画整理事業発掘調査報告書』岩手県滝沢村文化財報告書第31集

表1 報告書の記載

文献	名称	帰属時期	特記事項	記載内容
青森市教育委員会 1993『小牧野遺跡 発掘調査概報』	打製石斧	縄文時代後期	写真と実測図を 掲載	「両端をノミ状に剥離調整」、「あまり類例のない 貴重な資料」
青森市教育委員会 1996『小牧野遺跡 発掘調査報告書』	打製石斧	縄文時代後期以前のも の。ローム層中に含ま れていて後期の人が使 用か再加工した可能性 がある。 「斜面の高い方の土を ローム層まで削りとり (中略)古い時代の遺物 が当時の人々によって 掘り返され、地表に露 出したとも考えられ る。」	新たな写真と実 測図を取り直し て掲載	「2つに折れた状態で出土した。丸鑿状を呈しており、対をなす頭頂部にも調整が施されているが、刃部として使用できる状態までは至っていない。機能面と考えられる刃部に使用痕が見られないことから製作途中に破損したものと推測される。この石器に関しては環状列石構築前に作られた遺物の可能性がある。環状列石を構築する際、斜面の高い方の土をローム層まで削りとり、斜面の低い方又は周辺に盛土するという土木工事を行っているため、古い時代の遺物が当時の人々によって掘り返され、地表に露出したとも考えられる。さらに環状列石を構築した人々がその遺物を利用、又は再加工して使用した可能性も否定できないのではないだろうか。」
青森市教育委員会 2006『小牧野遺跡 発掘調査報告書 IX』	打製石斧	縄文時代か弥生時代か 不明	出土層位から時 期を考察	「Ⅱ層から出土したため、縄文時代のものか弥生時代のものかは定かではない。」 「遺構外から2つに折れた状態で出土し、刃部は両面調整で丸鑿状を呈している。」

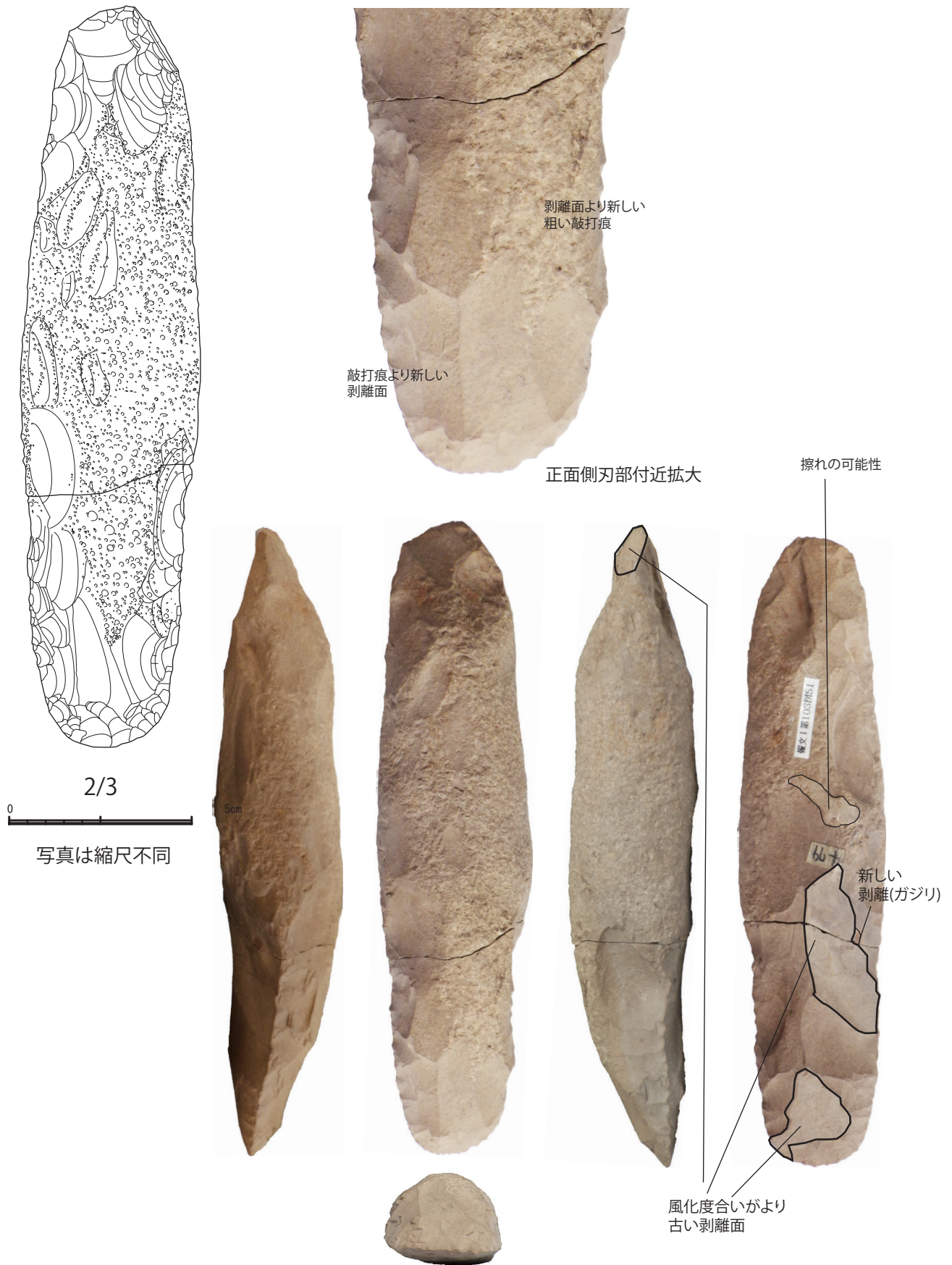


図1 小牧野遺跡出土大形打製石斧



図2 小牧野遺跡内の形状の類似する石篋と磨製石斧

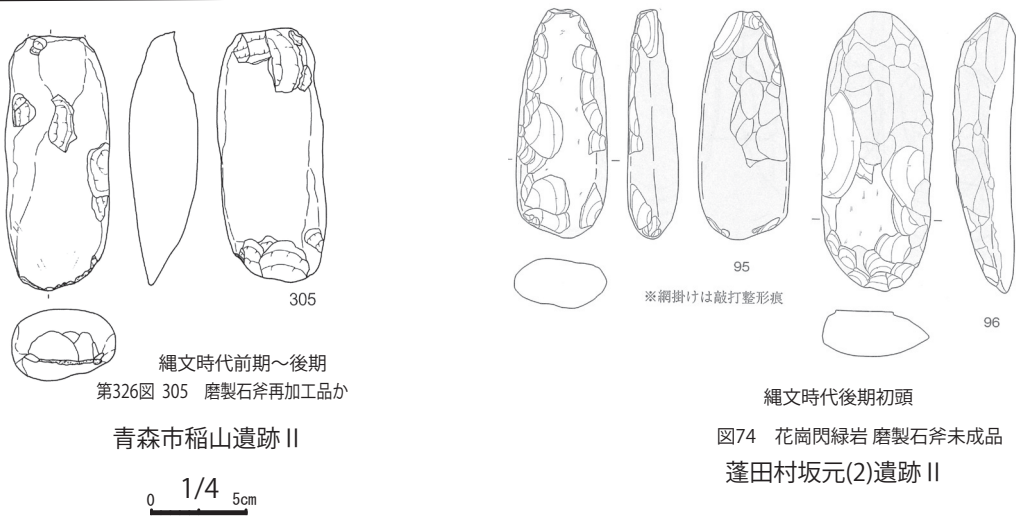
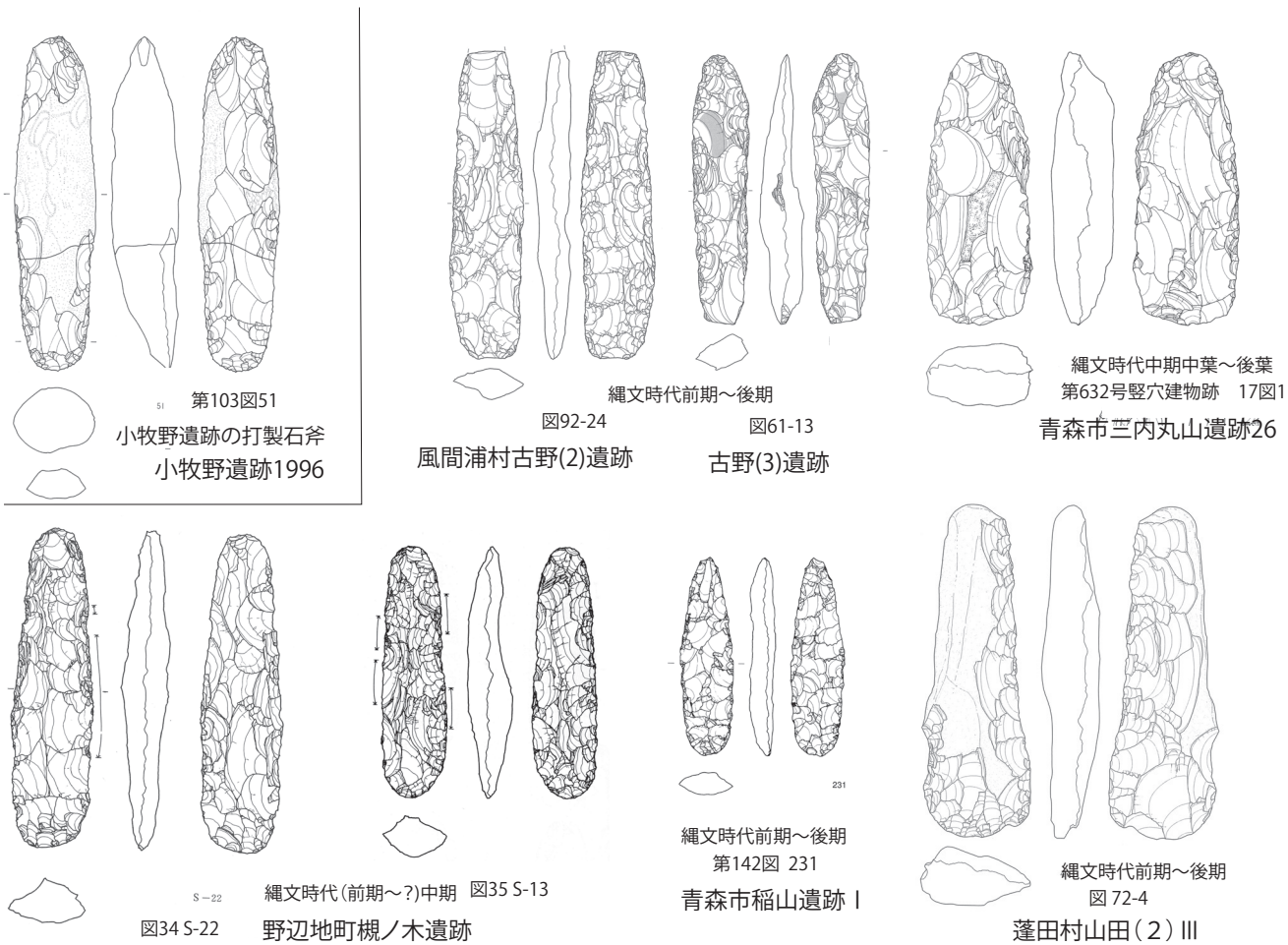


図3 他の遺跡の関連資料

青森県立郷土館研究紀要 第49号(令和7年3月) 正誤表

頁	行・図番号	誤	正
56	本文 8 行目	縄文時代前期前葉の可能性	縄文時代後期前葉の可能性